

シン・ハゲと修羅

コテコテ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

強さを求める少女は出会った
一人の強すぎるヒーローに

この小説は私が以前投稿した小説「ハゲと修羅」のリメイク版です

目
次

プロローグ	
第1話 奇襲	
第2話 ヒーロー参上!	
第3話 魔法少女 v/s ヒーロー	
第4話 強くなる意味	
	40
	29
	18
	8
	1

プロローグ

青年は力を求めた

悪を一撃で倒すヒーローを夢見て努力を重ねた
そして努力の果てに限界を越え、手に入れた無敵の力
あらゆる敵をワンパンで片付ける圧倒的な力の代償は
ヒトとしての心と頭髪だつた

少女は力を求めた
誰にも見下されない、何も奪われないために努力を重ねた
そして天才と称される才能を開花させ、手に入れた魔法の力
あらゆる敵に圧倒的な資質の差を見せつける力の代償は
ヒトとしての心と友人だつた



少女は誰よりも強くならねばならなかつた。

「両者前へ！」

あの日、暴力と惡意に屈した記憶は今も色あせることない。理不尽な現実を前にして、大切なものを何一つ守れなかつた。残つたのは悔やみきれない後悔だけ。弱かつたから馬鹿にされた。見下された。立ち向かえる強さがあれば、何も失うことはなかつた。ひたすら自らの弱さを呪い、そして誓つたのだ。もう誰にも見下されてないよう

に、何も奪われないように、誰よりも強くなると。

「両者構えて！」

審判に促されて拳を構える。この試合は変則ルールだ。DASS

公式試合と同じライフポイント制でこちらのライフは12000に対し、相手のライフはわずか5。ガードしていても削られるほどに少ない。それでいて回避禁止で攻守も左手のみという、本来ならあまりに厳しいハンデだった。

「二人共、ルールは頭に入ってるかな?」

「はい」

「なんとなく」

だが彼女は油断など欠片すら思わない。それほどに彼は強かつたのだ。わずか3年で手にしたという力は、彼女のそれを遥かに凌いでいた。圧倒的なその力を、少女は切望した。当然だろう。そこへ目指す強さのヒントがあつたって、何もおかしくない。だから、彼女は彼の申し出を受け入れた。

「……まあ大丈夫じゃろ。改めて両者！構えて！」

この戦いに勝てば強さの秘訣を教えてくれると、彼は約束した。勝てるかは正直わからない。だが彼を打ち負かしたとき、彼女は強さの頂へと大きく近づくに違いない。ならば迷いなどどこにあるう。今心に留めることは一つだけ。

「始めッ!!」

必ず勝つ。それだけだ。

二時間前 ミッドチルダ とある競技場のVIP席

「ここはミッドチルダでも一、二を争う格闘技専用の競技場なんだ。ボクのパパが出資者の筆頭だから、偶にチケットを融通してくれるんだ。今日の試合は絶対見たかったからいろいろ頑張ったんだよ!」

「ほうほう、それはスゴイ。地球の弟子にも君の忍耐力が欲しいわい」「へへッ！」

巨大なガラス越しの眼下には照明に照らされたリングが白く浮き

上がつていた。もう試合が始まるとあつて、会場は既に熱氣に包まれている。周りを見ると座り心地のいいソファーから少し腕を伸ばした位置に、映画館とかでよく見る感じのポップコーンやコーラなどの飲み物が置かれている。どんだけ食べても飲んでもタダというから驚きだ。VIPだ。どつからどう見てもVIP席だ。要は何が言いたいのかといふと――

「なんで俺はここにいるんだ？」

上下ジャージの男、サイタマがガラスの向かい側で首をかしげていた。

「なんじや不満か？ ヒーロー協会から割のいい仕事があつたからせつかく誘つてやつたといふのに」

答えてきたのはS級ヒーロー三位、バングだ。シルバーファングとかいうカツコいい感じのヒーローネームを名乗っている老人だが、これが何かと彼にチヨツカイをかけてくる。今日だつてそうだ。彼の企みに気づいたときには手遅れだつた。

「誘つてやつたつてなんだよ。攫つてきたの間違いだろ」

サイタマがバングを睨みつける。普段から感情の起伏が少ない彼が、ここまで不機嫌になるには理由がある。

「時給のいい仕事があるからつて道場に行つてみれば……」

「ヒーロー協会の幹部が説明してくれたじやろ。護衛任務の報酬なら任務の後に必ず支払うと」

「そつちじやねえよ。おれか言いたいのは、道場に着いた途端にワープで飛ばしやがつたことだ」

拒否権すらなく連れてこられたことが相当頭にきていた。こんな訳のわからぬことに付き合うぐらいなら、テキトーに家でゴロゴロして、怪人が現れたら殴りに行く生活の方が何百倍も何千倍もいい。異世界？ 魔法？ 意味がわからない上に柄でもない護衛なんて、彼には苦痛でしかなかつた。

「えっ!? 冒険っぽくて面白いじゃん!!」

「面白くねーよ!!」

日常にアドベンチャーは求めてない。どうもさつきから調子に

乗っている。なにせ初対面の相手に、「あつ！ ハゲだ！」とか抜かして礼儀知らずである。

――ふざけやがつて。後で覚えてろ。この…………あれ？

人の礼儀を言う前に、彼の名前を思い出さなければならぬようだ。

「落ち着いてください先生。相手は依頼者です」

「ジエノス!! けどこいつな！」

サイボーグのジエノスはS級ヒーローであり、サイタマの“弟子”だ。彼もまた、罠にはまつた一人であり、今は“師”的手を煩わせないよう、師と自分の二人分の仕事をこなしている。サイタマが座っているだけで済むのは彼のおかげだ。

「先生への暴言は万死に値しますが、ことを荒立てると報酬を減らされかねません。任務後に俺が始末――」

「止めて！ その後が面倒だから絶対止めて!!」

師を押すあまり暴走気味になることがたまにキズだが、クセのあるサイタマとは結構上手くやっている。充分優秀な弟子と言えるだろう。たぶん。

「ちくしょう……けどじいさんが言つた通り報酬はいいんだ。当分の生活費が手に入るんだつたら、一日ぐらい我慢してやる」

性格が悪い訳ではないのだ。ただ思ったことが、すぐ口に出るだけ。そう自分に言い聞かせるしかない。むしゃくしゃしながら、ポップコーンを口に運ぶ。塩味が効いてなかなか美味い。

「あつ！ 出てきた!!」

ガキの声につられて外のリングに目をやると、ちょうど二人の少女が入場しているところだった。片や明るい感じの不自然な髪色、片や白い長髪と、個性しかない派手な見てくれだ。

「すげー色だな。ああいうの流行つてんの？」

「知り合いはどうちだサンサーラ？」

「リンネ・ベルリネット！ 手前の髪が白い子！」

「あつ、サンサーラか」

「そうだサンサーラだ。ようやく思いだした。ついでに「ブサイクなくせにサラサラした名前しやがって」、が第一印象だつたことも思い出す。ハゲている自分を棚に上げていることには、全く気付いていなかつた。

「リンネ・ベルリネット。DASSU—15ワールドランク一位の強豪。デビューからほぼ無敗であり、敗北は判定負けの一度のみ。現在最も注目を集めているファイターの一人だな」「知つてたんですか？」

今朝誘拐されてきたとは思えない博識ぶりに、サンサーラが不思議そうに首をかしげる。

「入場の際に客から聞き取つてきた。大した人気だな」

「そりや僕が認めたファイターだからね。デビューした頃から注目してたよ！ 才能と練習量はもの凄いから!!」

「へえー」

ミーハーと思つていたが意外や意外、どっぷりコアなファンだ。確かに無名の時から応援してきた選手が、スターになつていくのは感無量だろう。格闘技の観戦に、わざわざ高級スーツを着込む気持ちはわかる。一途に応援し続けている姿勢には、サイタマも感心していた。

「同じ孤児院出身の子が活躍してるのは嬉しいや」

しかしその彼の口から、高級スーツの身なりとは合わない単語が漏れ出る。

「孤児院？」

「言つてなかつたつけ？ リンネと僕は養子なんだ。孤児院にいた時はちよつと話す程度だつただけど、お金持ちの家に引き取られた縁で応援してるんだ」

「あ、そなんだ……ふうん」

どう返せばいいものか……反応に困る。思緩々と育つたと思えば、想像以上に壮絶な人生らしい。そして何より、どこをどう間違えば、性格が金持ちの悪ガキになるのだろうか。孤児院の育て方が気になるサイタマだつた。

「ほれ！ 試合が始まるぞ！」

バングが促して微妙な雰囲気をぶつた切った直後、客席から歓声があがつた。野球やサッカーにも引けを取らない声援は大迫力だ。サイタマの想像を超えて、相当な盛り上がりを見せていく。

「案外人気あるんだな」

しかしサイタマは、格闘技には全く興味はない。少年少女、勝手に青春を燃やしてくれと、なんとなく眺めるだけだつた。口に運ぶポップコーンもせつせと早くなつていく。

「…………」

熱い高揚感や魂のぶつかり合いなんて、もう随分と感じていない。もう長い間、心が満たされたこともない。鼓動の高鳴りや緊張感というものは、今の彼とは無縁でしかなかつた。

「決まる！」

サンサーラが叫ぶ。同時にリンネが、対戦相手を豪快に投げ落とした。一瞬の静寂、そして――

『試合終了おおおオオ!! リンネ選手ッ！ 怒涛の早さでＫＯ勝ちだあああアアアア!!』

「あれ？ もう終わつたのか？」

ぼーっと見ているうちに試合は終わつてしまつた。

「いつ見ても圧倒的じやな。あの歳であれだけの力を持つ者はそうおらんじやろう。じやが……」

「とても子供同士の戦いには見えなかつた……魔法で身体能力や動体視力を強化しているのか？」

「うん！ これがこの競技の醍醐味なんだ。普通の格闘技とは迫力が違うし！」

そういうえばと、この世界が魔法の世界だということを思い出す。魔法といえば、摩訶不思議な呪文を唱えて杖を振り回すイメージがまず浮かぶ。ところが現実は魔法の杖じやなく、拳で語る魔法少女……そう思うとさつきの試合もかなりシユールだ。サイタマが思う魔法と実際の魔法はかなり違う。

「そういうえばワープした先も、銀色のハイテクな建物だつたつけ。けど、こつちの方が面白そうだ」

悪を倒すヒーローをしている身としては少女趣味な杖を振り回すより、男らしく質実剛健に戦う方が好みなのかも知れない。

「にしてもアイツ、つまらなそうインタビュー受けてるな。何でだ?」
勝ったというのに笑顔も見せない。あの年頃で嬉しくないはずがないだろう。そのはずが、勝つのは当たり前だと言わんばかりに、無表情で話し続けている。まるで感情をなくしたように淡々と。単にストイックといえばそれまでだが――

「……今日の俺達の仕事ってどこまでだつけ?」

「任務はサンサーラが建物の外に出るまでです。そこからは彼の家が雇っているボディーガードに引き続きます」

「わしらの任務は競技場内の護衛じや。ほれ、移動するぞ。通路のチエックはジエノス君、頼んだ」

「ああ。来た時と同じでいいな」

危険物の探知はサイタマやバングよりも、サイボーグのジエノスが適任だ。多分バングが欲しかったのはジエノスだけだつたに違いない。自分を連れてきたのは、確実にジエノスに仕事をさせるためだつたと、サイタマは思っていた。現に彼は護衛として全く何もしてない。だがそれはサイタマにとつても好都合だった。

「なあサンサーラ、さつきの白いヤツつて――

お前のことは知ってるのか――そう聞こうとして、サンサーラのいる後ろに振り向いた。

「ええ……

目を向けた先にはだれもいない。その代わりにサイタマの視界に映つたのは、半開きになつた壁と同じ色の隠し扉だった。

第1話 奇襲

——一時間前 ミツドチルダ とある競技場の選手用通路——

「——じゃあ詳しいことは明日話し合いましょう。今日はお疲れ様」

「お疲れ様です。また明日お願ひします」

簡単な試合の総括を終えて、ジルがリンネに背を向けて歩き去つていった。普段は一緒に出ることが多いのだが、今日はいつもと事情が違つた。

——リンネ。久しぶりに外で食事なんてどうだ?——

父の一言で久しぶりの外食が決まつた。試合の後にも家に戻らず、迎えの連れられてお店に行く予定になつてゐる。時間が来るまでジルと試合について話し合うつもりだつたが、急用が入つてしまつたので待ちぼうけになつてしまつた。試合が早く終わつたため、迎えが来るまでの待ち時間は、約二時間。連絡したら早めに来てもらうこともできたが、一人でいるのも悪くないと思つた。

「…………」

壁にもたれ、試合のことを思い返す。今日の目的は、練習してきた新しいフットワークの確認だつた。足運びの軽い相手にどれだけやれるのか試すつもりだつたのだが、数発打ち込んだだけで相手選手がダウンしてしまつたのだ。最低限の確認はできたとはいへ、正直期待外れもいいところだつた。

「はあ……」

せつかく家族揃つての外食だというのに、リンネの気持ちは盛り上がらない。それほど今日の相手にはガッカリしたのだ。やりたいことがやれなかつた。試したいことが出し切れなかつた。試合を思い出せば出すほどがつくりくる。

「相手はもつと選ばなきやいけなかつた。こんなことで試合を無駄にするなんて」

ポツリと漏らした本音。誰に話す訳でもない呟きは、そのまま溶け

て消えてしまうはずだつた。

左の言葉 桜手の前でも語る、

11

一度気付くとリンネは速かつた。思考に没頭して気配に気付かなかつたのは失態だが、考えるより先に身体は動いた。軽やかに身を翻し、瞬きほどの間に背後から声をかけた相手と相対した。

あなたは……」

腰を落としていたのも迎撃できるようにならなければ、スースを着こなすおかっぱ頭の男の子。友達ではないが会えば話す程度の、何度も会つたことのある見知った顔だつた。知り合い兼ファンの一人だ。名前は確か……

なんたつたつい

「あー！ また僕の名前忘れてるだろ！」

鈍そうな見た目の害に感か鋏い サンサリテは昔からそしたつた瞬黙つただけでも大概見破つてしまふ。状況はリンネに不利だ。だが素直に認めるのもこれもまた癪だ。何か負けた気になる。

「じゃあ言つてみてよ。制限時間は三秒。サン、二イ——」

少
意

少し意地を張つてみたらもつと状況が悪化してしまつた。三秒で思い出せる訳がない。敗北決定。

「……気をつけます」
「…………」

「サンサーラだよ。サンサーラ・トウールド。昔の呼び方が嫌なら次に会うときまでに覚えといてよ」

「善処します」

リンネは名前を覚えるのが苦手だ。関心のない相手の名前はほとんど覚えられない。だがサンサーラについては関心がない訳ではない。一応幼馴染と言える上に、応援をしてくれている相手に関心がない。

いほどリンネは薄情ではない。彼の名前を覚えられない理由は、他のところにあつた。

「怪しいなあ……まあ今はいいよ。今日はサインを頼みに来たんじゃないんだ。別の用事で君に会いに来た」

「別の用事…………」

リンネ弄りもほどほどに、サンサーラは話を切り出した。彼がリンネを訪ねてくるときは、大抵友達にサインを頼まれたときである。書いて減るものではなく、普段から応援してくれているお礼も兼ねて、リンネもできる限り対応している。それが違うというなら――

「では貴方と話すことは何もありません。ご足労申し訳ありませんが帰つてください」

「ヒドイなあ。僕は心配しているんだよ？」

「貴方に指図される覚えはありません」

「親戚のおじいさんが亡くなつたのに？」

わずかだが、頭に血がのぼるのを感じた。確かにベルリネット家とトウールド家は遠縁にあたる間柄だ。サンサーラの両親も、会う度にリンネによくしてくれる。だがそれとこれとは話が別だ。牽制の意味で彼に向ける視線を鋭くするも、サンサーラは探るような目つきを止めようとしない。

「勝つても全然喜ばない。負けてもちよつと悔しそうにするだけ。君さ、いつまで引きずつてんの？ このままだと本当に戻つてこれなくなるよ？」

「貴方には関係ないことです」

「いや、関係あるね。君が潰れちゃつたら、事情を知ってる僕が嫌な気分になる。知り合いつてだけでとばつちりを受ける身にもなつてよ。そんなこともわからないなんて、格闘家以前に人としてダメ。わかる？」

「黙つて――――いえ……帰つてください」

まるで口から生まれたかのように、サンサーラは話を止めなかつた。リンネにはいい迷惑だ。要は自分が強くなれば、彼も不快な思いをせずに済むのである。大切な人達を安心させるほどに強くなると、

あの日から彼女は心に誓つた。だから何を言われたって今のやり方は変えるつもりはない。

「悪いけど簡単には帰らない。やっと初めて護衛を撒けた『……』のに、自分から戻るなんてバカはしないよ」

「でしたら貴方のお連れの方に――――？」

そんな彼女の誓いを試すかのように、サンサーラは言葉の火の粉を振りかけた。

「撒いたつて……まさか、誰にも言わないでここに来たんですか!?」

「そうだけど？　つて、何で焦ってるの？」

「何ッ……!?　戻つてください！　早く!!」

「え……イヤだよ」

冗談じゃない！　とリンネは思つた。何で勝手に出歩いてるんだ！　他人には嫌な気分になるつて言つておいて、自分の周りは心配させて言い訳ない！　今頃彼のボディーガード達は必死で探しているだろう。もしかしたら家族来ているかもしね。大切な人達を不安にさせる行為を、リンネは絶対に許せなかつた。

「だつたら！」

「いや!?　ちよつ待つ――――!?」

家の誰かに言えばサンサーラの両親に伝えられる。急いで通信を繋ごうとした、そのときだ。

「だから待つてつて！」

ほとんど反射だつた。大きく後ろに跳んだ直後、さつきまでリンネの顔があつたところを不穏な音をたてた掌底が突き抜けていく。滑るように着地しつつ、前の男の子を捉えようと顔を上げる。だが――

「言つてるだろっ!!」

顔馴染み男の子は、もう視界にはいなかつた。代わりに懐の低い位置から、聞き慣れた声がする。

「ちつ！」

体を反らして突き上ってきた拳をギリギリ避け、勢いのまま後ろにバク転で距離を取る。避けたはずなのに、信じられないほどの拳圧が

前髪を吹き上げた。再び体勢を立て直し、今度こそ拳の主を視界に收める。

「サー君が……まさか…………」

「あーあ、やつちやつた。女の子に殴りかかるなんて。今年最大のショックだよ。怒ってる？」

「ううん……驚いたけど…………」

「そつか、よかつた。でも僕は謝らないからね！　当てるつもりはなかつたし。こうでもしないと君、止められないし」

いつも通りの軽い口調。だが今の鋭い動きは素人ではなかつた。間違いない格闘技の心得のある人間のそれだ。それも敢えてリンネが避けることのできる、ギリギリのタイミングで仕掛けるほどの力量である。動きの一つ一つが連動した身体のこなしは、同世代のワールドランカーにも匹敵するだろう。只々驚いた。追っかけだと思つていた男の子が、こんなにも強かつたなんて。

「…………邪魔をするつもりですか？」

「どつちかつて言うと君が邪魔してるんだけどなあ。ちなみに交渉の余地は？」

「あるとでも？」

「だよねー。まあ何でもいいや。だつて――――」

リンネが構えを取ると同じタイミングで、サンサーラの両手が青い魔力で覆われる。目に見えて魔力の密度が高い。一撃の重さはリンネまでとは言わずとも、並みのパワー・ヒッターとは一線を画すだろう。そこに微塵の躊躇すら見せないサンサーラを見て、リンネは確信した。

「君はここで負けるし」

彼は本気で、私を倒すつもりだと。

「その言葉、そのまま貴方にお返します」

返事を返したときには、サンサーラは視界から消えていた。

「同じ手は通じません」

だが今度はさつきとは違つた。上空からの蹴り落としを横への最小限の動きで回避する。落下の勢いのまま、コンクリートを蹴った音

が重々しい。そしてこのチャンスを見逃すリンネではない。不安定な体勢で着地したサンサーラめがけて、魔力を纏つた蹴りをブチ込んだ。

「おつと」

動くことのできないサンサーラは、左腕で蹴りを受け止める。衝撃波のような風が周りを吹き抜けて鈍い打撃音が廊下に響いた。相手によれば腕が使い物にならなくなつてもおかしくないが、彼の笑顔が今の状況を物語っていた。かなり硬いガードのようだ。

「速いと鋭い身のこなし。視野から外れる動きが並外れている。そこへ緻密な魔力の運用で身体を。ピンポイント強化し、脚力、打撃、強度を爆発的に高めた。そんなところですか？」

「ランク一位のファイターがわざわざ講評してくれるなんて感激。分析力も並みじやないや」

「ですがそれだけです。もう一度言います。私に、同じ手は通じません」

そう言うなり、リンネは足を戻してミドルを打ち込む。かなりの速度だったが、サンサーラは苦もなくガードした。

「ぐつ!?」

だが蹴りのときは違い、サンサーラの表情があからさまに歪む。蹴りを受けたときは明らかに様子が違つた。そこへリンネは間髪入れず、更に左手で打ち込む。

「うぐっ!? なんで!?」

再び苦しそうに呻く。それでもリンネは止まらない。次から次へと容赦なく殴打を繰り出す。サンサーラにガードはされるものの、その度に大福の良い顔は苦痛の表情を見せる。そして数にして十一打目で――

「うぐアツ!!」

リンネの右腕がサンサーラのガードを弾き飛ばした。

「くそ！」

だが止めを入れる前にサンサーラが間合いから外れた。彼の俊敏な動きを避けることはできても、捉えるのはリンネの実力を以てして

も簡単なことではない。彼女もむやみに追うこともできず、拳を休めることになってしまった。

「……逃げられた」

「そりや逃げるから。僕以上の魔力で殴つてくるなんて」

「そうですね。私もこんなに魔力を使うことになるとは思いませんでした」

「上から目線とか、生意気なヤツ」

恨めしそうに痛めた腕を振るサンサーラ。一撃が必殺に値するリンネの打撃を、これでもかと受け続けた結果だ。しかしそれも、両腕が淡いブルーの光に包まれると、すぐに表情が和らいでいく。この回復速度からして、とても高度な回復魔法だ

「格闘技術といい、一体どこで……？」

「趣味の習い事だよ。強い人が誰しも、君のように毎日血反吐を吐いたり、日の当たる場所にいる訳じやない。人の数だけ生き方がある」聞きようでは、リンネへの当てつけにも聞こえるサンサーラのセリフ。だがそんな煽りに彼女が乗らないことは、ファンの彼はよく知っているはずだ。幼馴染の意図を、彼女は計りかねた。

「本気の私に、貴方は趣味の範囲で渡り合っている。そういうたいのですか？」

「いいや違う」

再びサンサーラが、あの独特な構えを見せる。腰を落とし、指先を僅かに曲げる姿はリンネも見たことのない。見る者にしなやかさをイメージさせる構え方だ。

「君には君の生き方があるって言つたんだ」

サンサーラが、滑るようにリンネへ駆け出す。ところがさつきまでの身のこなしはどうしたのか。視野から外れる動きでなく、直線的だ。構えも曖昧で隙ばかりだ。狡猾な罠か、一発逆転の特攻か、はたまたリンネを惑わせるための作戦か。だが、彼女に構う余裕はなかつた。

「なら貴方が望む生き方は、私の望むものとは違う」

拳を握り、相手を見る。側から見ると、強さへ全てを捧げるワール

ドランカーに、道楽の一つとして嗜む一般人が食い下がっている構図だ。だがリンネは違う。必死になる弱者を、片手間の趣味で凌ごうとする強者が迫つてゐる——噛み締めた奥歯が軋んだ。

「私は貴方みたいに強くないんだ」

伸びてきた腕を、左下に姿勢を下げて容易く躱す。速いだけの、力のない裏拳だつた。当然、伸びきつた腕の下はガラ空きだ。

「趣味に現を抜かせるサー君みたいに、私は強くないんだ！」

その無防備な脇へ、魔力を纏つた拳を全力で叩き込んだ。

「そう来ると思つたよ」

利き腕に走る衝撃。あるはずの手応えもない。左に寄つて脇を狙つた筈が、気付けば目の前にサンサーラの身体があつた。やはり罠だつたのだ。渾身の一撃は、残されていた彼の腕に弾かれていた。

「流水岩碎拳、知つてる？」

ガードの間もない。緩く握られた拳が、残像を残してリンネの喉の下を打ち抜いた。

「がアツ!」

息ができないほどの衝撃と共に、リンネの身体が宙を舞う。このままだと床に叩きつけられてしまうだろう。ひどい痛みが襲う中、咄嗟に空中で姿勢を安定させる。廊下を数メートル吹き飛ばされるも、何とか足から着地することができた。

「んー……そのまま落ちてくれないかあ。何が僕より強くないだよ。ずっと強いじやんか。比べものにもならない」

「……馬鹿にしているんですけど……ケホツ」

膝をついたまま立ち上がれない。さすがのリンネでも、そう何度も耐えられる技ではない。流れるような見たことのない拳筋は捉えにくく、確実に急所を打つたきた。呼吸をすると、まだ喉に痛みが走る。「君は僕の方が強いって思つてるの？ だつたらチクるの止めてくれるかな？ 趣味でやつてる人に負けたくないよね？」

「馬鹿を言わないでください」

「そうだよねえ…………」

だが諦めるとは話は別だ。一発当たつた程度で降参するものか。

内心でリンネは悪態を吐く。確かに連打を食らうとマズいが、この程度の単打ならもう当たらない。次の攻撃をリンネが先に当てたら、それで勝負は決まる。

「大切に想つてくれている人を蔑ろにする貴方を、このまま許すことはできません。そして何よりも……」

床についていた膝を浮かせて、リンネはゆっくりと立ち上がる。痛みは軽くなり、思考も澄んでいる。雄々しいファンティングポーズを取り、憮然と佇むサンサーラに、戦う意思を見せつけた。

「こんなところで止まつていたら、また私は大切なものを失う。趣味で格闘技をしている人間より弱いなんて！ そんなことは、絶対にあつてはいけないですっ！」

貴方が私より強いのなら、今の私はもつと強くないといけない——悲壯とも取れる想いが、リンネから溢れ出していた。精神面の弱さ、自己肯定の弱さといった人としての“弱さ”は、——事実か否かはともかく——リンネにとつて非常に大きなコンプレックスだ。だから大切なものを守れる“力”だけは、誰よりも強くならなければいけない。“弱さ”を覆い隠し、彼女を世界と繋ぎ止める“楔”である“力”が、よもや幼馴染の道楽に超えられるなど、あつてはならないことだ。

「…………まあいいや。勝つちやえれば止まるだらうし」

サンサーラも、流水岩碎拳の構えを取る。リンネを遥かに格上だと認めた上で、また勝てると思つてゐるのだ。上等だ、受けて立とう。正面から受けて、力ずくで乗り越えてやる。そして、証明するのだ。リンネ・ベルリネッタは、サンサーラ・トゥールドよりも強いのだと。遊ぶ半分でやつてるヤツなんかに、負ける訳がないんだと。

「スクーデリア」

「シルバースクワッド」

二人がデバイスを取り出す。ここからは互いに無傷ではいられないとだろう。どちらかが倒れるまで、決して終わらない戦いとなる。リンネの目にはサンサーラしか映つていなかつた。下世話な話をすると、ここが競技場の通路だということや、魔法が禁止されていること

など、てんで頭に残つていなかつた。倒すと誓つた目の前の相手だけを見て、リンネはスクーデリアを掲げたのだ。

「セツトアツブ!!」

前だけを見て掲げたのだ。

「お前さ」

「?」

それ故、光に包まれる直前にリンネは見てしまつた。

「ちょっとやりすぎ」

サンサーラの背後をとつた、見知らぬハゲを。

「へぶういッ!!」

「?」

一瞬の光の中で生々しい音と衝撃音、謎の奇声にビビリながらバリアジャケット装着し、再び廊下が彼女の視界に映つたときには――

「.....」

手刀を構えたハゲの足元に、幼馴染がめり込んでいたのだった。

第2話 ヒーロー参上！

「事情がありそだから放つておけば……なんで廊下で本気にならうとすんだよ。迷惑だろ」

チヨツプの構えをしたスキンヘッドの男性がサンサーラを叱りつけている前で、リンネは立ち尽くしていた。男性からは魔力を微塵も感じない。身体能力だけでリンネとサンサーラ両者が察知できない速度で接近し、床をも碎くパワーで後者を叩き伏せたのだ。

用の前で記述する。この段階では、データの整理と分析が行われる。

目の前で起きたことをどう処理したらいいのかわからず呆然とす
ることしかできなかつた。

下

めり込んでいたサンサーラがゆっくりと立ち上がる。派手に叩きつけられた割に怪我はないのは、直前で顔にバリアを張ったからだろうか。少し怒った様子で、自分を沈めた男を睨みつけた。

「な、何で僕がいたの？」

カシマ・ジーマー著

「……流水岩碎拳を使つたのは黙つてくれる？」

「乗つた」

どうやらあの男性はサンサーラのボディーガードらしい。確かに二人に気取られないスピードと床を割るほどのパワーは、護衛に迎えるに充分魅力なのだ。隣にいてくれたらこれほど心強い味方はいない。いないので……

あの服装は……無理かな

一言で言うと、人として品位がない。上下ジヤージ姿というのは、リンネの家なら面接開始五秒で落選だろう。

「よし、交渉成立。で、お前は確か――」

そんなこんなでボヤーツと二人を観察していたリンネに、無気力な目が向けられる。

「レンゲ・クルマバツタ——」

「リンネ・ベルリネットです」

「あ、悪い」

昔辛い虐めにあつたリンネも、食器と昆虫扱いされたのは生まれて初めてだつた。ちなみにクルマバツタとは、あの有名なトノサマバツタと非常に似ている大型のバツタの名である。

「一発やられてたけど大丈夫か？ 怪我ないか？」

「大丈夫です……お気遣いありがとうございます」

心配した、というよりただの確認だ。そこに思いやりのような暖かさは感じなかつた。代わりにあるのは、ただの薄気味悪さだ。尤も、表情なし、感情なし、髪の毛なしの男を前に、何も思わない方がおかしいが。

「無傷ならいいよ。なんかお前マジつぽかつたから大丈夫かなつて。続々はもういいのか？」

「別の機会にします。残念ですが……今の彼にやる気はないでしようから」

「何の得もないのに、本気のリンネと試合なんて嫌だし」

元を辿れば、サンサーラが護衛を呼ばせまいと殴りかかつてきたのがことの発端。こうして見つかつた今、彼がわざわざ殴り合う必要はなくなつてしまつた。ものぐさな性格で実利主義のサンサーラが、ここで動くことはもうないだろう。

「口を改めてもやらないよ。そんなにやりたいなら僕じやなくてサイタマさん……あ、ボディーガードの人ね。この人と模擬戦やつたら？ 強いよ？」

「私は貴方と戦いたいんです」

もちろんリンネも彼の性格をよく知つており、しつかり準備を整えてから、再度チャレンジするつもりだつた。

「なんだ、模擬戦代わつてもいいのか？」

「えつ？」

が、世の中そう上手くいかない。

「ホント!? 代わってくれるの?」

「言つとくけど今日は、つて話だぞ。俺もあいつにちょっと用があるんだ」

いやいやと、リンネは小さく首を振る。用があるか知らないが、どうして戦おうとなるのか。サイタマは「拳を交えてわかることがある！」というタイプではない。格闘家じゃなくても、誰だつて一目でわかる。

「どういうことですか？ 貴方が私に用事？」

「さつきの試合見てたら“魔法”ってのに興味が湧いたんだよ。お前、子供の中じや強い方みたいだし、ちょっと体験するだけなら丁度良いと思つて」

「…………」

リンネの目つきが鋭くなる。試食品をつまむノリで彼女に挑んできた人間は、おそらくこの男が初めてだつた。U—15とはいえ、リンネ・ベルリネットはワールドランク一位のファイター。相手が年上のときでも、最低限のリスクペクトはあるた。

「他にはええつと…………ああ、さつきお前、強いとか弱いとか気にしてただろ？ 僕が勝つたら理由を教えてくれねーかな？ 幾らストイックつていつても、子供が勝つても笑わねえのはおかしいじやん」
ところがこの男は、リンネを子供の割に強い魔法使いの少女程度にしか扱つていない。格下、子供扱い……彼女には耐えがたい屈辱だ。
このボディーガードは、全てを捧げて強くなろうとしているリンネを“弱い”存在としか見ていない。拳句に人の心の奥底に、土足で踏み込もうとしている。

「それは貴方の都合でしよう。私が心の内を話す義理はありません。知りたいのならそれに値するだけのものを示してください。話はそれからです」

そんな安い挑発には乗るまいと、リンネは決めていた。もし挑発でないなら、相応の覚悟を見せろと言つたのだ。もし彼女が納得できるだけのものがあるのなら、全身全霊を以て彼の認識を改めさせる。自

分は決して弱くない。子供扱いされるような、無力な存在ではないと認めさせるつもりだ。

「値するつて言われても……じゃあ逆に聞くけど、お前は俺のことでも知りたいことあるか？」

「…………今日初めてお会いしたので何とも……」

「そりやそうだ。うーん…………困った」

リンネの意図と微妙にズレてる気がするが、サイタマは何とか案を捻り出そうと首を傾げていた。眉を八の字にして唸つてている。

——こんなに考えるつてことは本気なのかな？

少なくとも只の挑発ではなさそうだ。無遠慮だつただけかもしない。それはそれで腹が立つし、前言撤回をするつもりはないが。サイタマには悪いがこのまま唸り続けてもらうことになる。

「えつ、何もないの？ 嘘だよね？ 練習の虫のリンネなら絶対に聞くと思つたんだけどなあ。へえー、聞かないんだ！」

サイタマの意図がはつきりしないところに、サンサーラが拗ねたような、馬鹿にしたような調子で口を挟む。普段のリンネなら軽く流すのが定番なのだが今は間が悪かつた。幼馴染とサイタマのせいで低くなつた沸点に達してしまつたのだ。

「会つたばかりのサイタマさんに何を聞くの？」

「あつ、もしかして怒つてる？」

「ちゃんと答えて。何を聞けばいいの？」

口調が素に戻つていてることにも気付かないで、サンサーラを聞いただす。リンネ自身も八つ当たりの氣があると自覚しつつ、わざと怒らせるような態度を取る彼を睨みつけた。

「君は絶対に聞かなきやいけないことが一つある。今の生き方を、君が望むものならね」

「何も知らないで聞けることなんか――――――

「じゃあ、サイタマさんがどうやつて強くなつたのか知りたくないんだ？」

さつきまでのふざけていた口調とは違う、低く、小さな声だ。そのサンサーラの言葉が耳に入つた瞬間、熱くなつたリンネの頭は一瞬で

冷え込でしまつた。

「いや…………でも…………」

別にサイタマが、サンサーラを一撃で叩き伏せたことを忘れてた訳ではなかつた。彼のあまりのオーラのなさと模擬戦の申し込みの衝撃で、そこまで頭が回らなかつた訳でもない。単純に選択肢としてなかつたのだ。自分が強さを求めるキッカケを話さないよう、いわば企業機密と言うべきところを教えてくれる訳がない

「リンネが勝つたらいいよね？」

「俺のトレーニングメニュー？　いいよ」

「!?」

ところがサイタマは、それを二つ返事で賭けてしまつた。耳にした言葉が信じられなかつた。魔力なしで超人的な身体能力を手にできる方法など、格闘家なら誰でも喉から手が出るほど欲しいもの。逃さない手はない。リンネは一人慌てているうちに、サンサーラがまた口を挟む。

「でもそのままやつたら勝負にならないか。DASSの設備を使つてサイタマさんにハンデをつけよつか。少しは面白くなるかもしけないし、怪我の防止にもなる」

「DASSつてさつきの試合の？　構わないけど」

あれよとあれよと話は進み、いつの間にかリンネのサイタマが模擬戦をする流れになつていて。どうも話が良すぎるが、リンネが拒否する理由は何一つなかつた。覚悟としては充分すぎるし、むしろぜひ戦ってくれと自分から言いたいぐらいだ。

——あと二時間……

迎えが来るまで充分時間はある。

「貴方の大切なものに誓つて答えてください。今の言葉に嘘偽りはありませんか？」

「子供相手にこんな嘘つかねーよ。大人だぞ、俺は」

「こ、子供…………」

やはり子供扱いされている。この瞬間、リンネの答えは決まつた。「……わかりました。相手にハンデを負わせるのは不本意ですが。サ

イタマさん、私の全力をもつて貴方の申し出を受けさせてもらいます

「おう。よろしく」

ハンデを受け入れるということは、自分がサイタマよりも弱いことの認めているに他ならない。リンネにとつては最大級の屈辱だ。それでも提案を飲んだのは、発案者がリンネとサイタマの実力を知るサンサーラだつたからに他ならない。

——普通にやつても絶対に勝てない……そういう相手なんだね。サー君。

公式戦仕様のルールと、クラッシュユエミュレートをはじめとした安全策を使わないといけないほどの実力差がある——リンネの強さをよく知るサンサーラの判断は重い。ハンデがあつたところで一筋縄とはいかないだろう。

——それでも私は……知らなきやいけない。

知つて強くならなければいけない。そのためには勝つしかない。あの強さを手に入れることができるならどんなことでもすると、リンネは覚悟を決めた。

三十分前 ミッドチルダ とある競技場の選手用通路

模擬戦をするということで話がまとまつた三人。早々とサンサーラが予約したというトレーニングルームに足を向けているところだ。ひと段落着いたこともあつてか、さつきまでの殺氣渦巻く雰囲気から穏やかな空気へと変わっていた。

「あれ？ リンネ、ジルさんに言わないの？」

端末を使って予約フォーラムを開いたサンサーラが首を傾げた。リンネが模擬戦をするとなると、コーチであるジルの許可は必須。本來なら連絡をしなければいけない。

「必要ありません。コーチは今頃別件で忙しいでしようし、私も進んで大怪我をするほど馬鹿でもありません。その辺りの裁量は私に任せています」

「……本当？」

「はい」

というのは真つ平な嘘で、今言つてしまつたら絶対に止められるからだ。公式戦をこなし、サンサーラとも手を交えた直後に模擬戦なんて話も聞いてもらえない。きっと日を改めてなどという話になるだろう。手を伸ばせば掴める頂きを前に足踏みするなど、リンネには耐えられない。

「なのでサンサーラさん、治療と回復をお願いします」

「言うと思つたよ……」

ため息混じりにサンサーラは端末を閉じて、右手をリンネの背中に当てる。淡い青い光がその手からリンネに広がっていき、彼女の全身を包んでいった。

「なんかRPGみたい。魔法っぽい魔法もあるんだな」

「一言魔法って言つても色々種類があるよ。魔力素を運用してたら取り敢えず魔法って言えるし。地球なら、数学とか物理学を利用した技術が一番近いかな」

実際のところ、学生時代に数学が得意だった高ランク魔導師が多い。他に苦手科目があつたり、数学だけが得意だつたりとケースは様々だが、一般的によく見られる傾向だ。

「へえー。じゃあお前ら計算とか得意なのか。買い物とか家計簿つけるとき便利そうだなー」

「それは……どうなんだろう？」

「どうなんでしょう？」

魔法の話だつたはずが生活の話になつた。そしていまいち実感の

湧かない富豪の養子二人組。如何に節約するか、日々努力を重ねるサイタマとは相容れない瞬間だつた。

「お前ら今は金持つだつけ？ もしかして電卓ちゃんと打つたことない？」

「ないよ」

「ないです」

「あれつて打ち間違つたりしたら結構面倒なんだぞ。頭の中で全部できたら絶対便利だから」

「そうなんのかな？」

「そうなんですか？」

「…………地球の庶民はそうなんだよ」

孤児院で見たことはあつても、電卓など使う機会はなかつた。ベルリネット家とトゥールド家に迎えられてからはもちろん皆無。学校でももちろんない。市井で暮らす市民の感想は受け入れられなかつたようだ。

「あの…………もしかして私、失礼なことを…………」

「リンネ、気にしなくていいよ。素で人をバッタ呼ばわりした方がよっぽど失礼だ」

「お前もだよ！ 人を凹ませるのは！」

天然金持ちの少年少女と価値観のズレたスキンヘッド……結論。ここにいる全員がナチュラルだ。

「よくわかんないけど、まあいいや。一番いいところの予約とれたんだし早く行こう」

「随分簡単に取れたんですね」

「出資者の名前とリンネの名前を出したら一発だつた」

「金と知名度の力つてすごいんだな」

どちらも持つていらないサイタマ、心からの感想だつた。金はともかく知名度はできるのならもつと高めたい。強さにしか興味のないリンネと違つて彼にとつて、それはとても重要な問題なのだ。

「さつき地球の話をしていましたけど、サイタマさんは地球出身なんですか？」

戦う相手の身の上は知らなくても問題ない。これはリンネの純粋な興味だ。あれだけの強さを誇る男がどういった人間なのか、どこで、どんな暮らしをしているのか、知りたくなつた。

「出身つーか、今も地球で暮らしてゐる。割のいいバイトがあるつて言われて、今朝いきなり連れて来られた」

「管理外世界からの出張警護!？」

「いや、只の誘拐だから」

無駄にスケールが大きい。だがそれは、わざわざ管理外世界からミッドチルダまで連れてくるだけの価値があるということ。絶大なサイタマの実力を示していると考えたら――

――甘かつた…………想像以上に厳しい戦いになるかもしない。

性格は別として、リンネは彼の評価を引き上げた（リンネ個人の感想です）。

「ではお仕事はフリーのボディーガードを？」

ミッドチルダに住むサンサーラの耳に届くほどだ。かなり名の知れたボディーガードに違いない。財閥の御曹司の警護をバイトと言つてのけるあたり、どれだけの修羅場をくぐってきたか伺いしれる（リンネ個人の感想です）。

「ボディーガードはヒーロー協会の依頼。俺はプロのヒーローだ」

そう思つていたものだから、サイタマの言葉をリンネはすぐに理解できなかつた。

「ヒーロー、ですか？」

「そう。ヒーロー」

「ええつと……」

さすがのリンネも、すぐに答えることはできなかつた。ヒーローといえば怪人倒し、人々を救うテレビで見るような姿が思い浮かぶ。そのイメージは簡単にできた。かつてミッドチルダを救つた“奇跡の部隊”のような存在だろう。それにサイタマが口にしたヒーロー協会という組織……

「つまりサイタマさんはヒーロー協会所属の、人助けを仕事にする

ヒーローと呼ばれる身分の方?」

「なんか堅苦しいけど大体合ってる。俺がプロになつたのは最近だけど。知名度は上がつたのは、プロのいいところだな」つまりプロになる前は、アマチュアでヒーローをやつていたことになる。

「プロになる前からヒーロー活動を?」

「さつきから質問ばつかだな。三年前から始めた。トレーニングを始めたのと同じ時期」

「三年!」

思わずその場で立ち止まるリンネ。三年など、彼女の格闘技歴より短い。リンネも今の位置に至るまで、血反吐を吐く努力をしてきた。その強さを遙かに超える力を、短期間で手に入れたとは到底信じられなかつた。

「だが先生の言うとおりだ、リンネ・ベルリネツタ」

「ひつ!?」

背後からした声にリンネは素早く振り向く。ほぼ同じタイミングで、サンサーラは素早く距離を取ろうとしたが、動く前にその肩を掴まれてしまつた。

「おつ! ジエノス! じいさんも一緒か! よくここがわかつたな」

リンネの目に入ったのは、冷たい表情の青年と腰の曲がつた老人だつた。どうやらサイタマの知り合い——サンサーラのボディーガード達だ。

「全くじや。ジエノス君がいなければ見つけられんかった。おそらく隠し扉から脱走したサンサーラを探しに出たのじゃろうが、今はちよつと状況が変わつたようじやのう。のう、サンサーラ」「はい……バング先生」

リンネと同じ白髪の老人——バングが周りを見渡す。穏やかな話し方の一方で、その右手はサンサーラの肩をしつかり握つてゐる。捕縛された方はガタガタ全身を震わせていた。

「先生とサンサーラの生体反応を探し回り、何とかここに…………ど

こに行こうとしていたんですか。リンネ・ベルリネツタまで連れて一
体何を?」

ジエノスと呼ばれた青年は、リンネとサンサーラを探るような目つきで警戒している。先生と呼ばれたサイタマは「おう」と一度言うと、リンネを指差していつもの気軽さで答えた。

「ちょっと魔法体験してくるわ」

第3話 魔法少女 v/s ヒーロー

——時間前 ミツドチルダ・とある競技場のトレーニングルーム

ジェノスの目から見て、広いトレーニング場の中心で向かい合う二人は対称的だつた。白髪の少女——リンネは、遠目から見ても鬼気迫る気迫が全身から溢れていた。対してサイタマがいつも通りだけに、なおさら際立つてゐる。

「焦つているな。さつきの試合とは大違ひだ」

「やつぱりジェノスさんもそう思う? ホント心配だよ。絶対無茶するもん」

ジェノスの隣では彼の護衛対象であるサンサーラ・バレーノが、二人から目を離さず眺めていた。口で心配だと言つてゐる割に、柔かな笑顔を見せて いる。

「ならどうして笑つて いる。何が楽しい?」

「単純に試合として面白 そ うだから。リンネは僕がチョップで倒されるところを見てるし、サイタマさんはリンネの試合を見てる。互いが相手の力量をそこそこわかつて いる上で、どんな戦い方をするのかなって」

「そういうことか」

そういえば、ジェノスはサンサーラがリンネのファンだつたことを思い出す。応援している選手がサイタマ相手にどう立ち回るのか、サンサーラが気にして ても何らおかしくはない。

「今ので納得するんだ……」

「本気で心配なら笑つていられるはずがない。理由がどうであれ、お前はあいつを信じて いるんだろ?」

「はは……まあ悲観はしてないよ。リンネもメチャクチャ強いからね。このハンデなら、リンネにもワンチャンあるかもしねないし」「……」

ジェノスは何も言わなかつた。サンサーラには悪いが、それは絶対

にあり得ないと彼は確信している。ジェノスが知るサイタマなら、両手両足縛られていても負けるほうが難しいだろう。魔法というものがやや不確定要素だが、さつきの試合のレベルなら不安材料にすらならない。

「でも負けるのも悪くないと思うんだよね」

「何?」

サンサーラの意外な考えにジェノスは眉をひそめる。確かに敗北から学ぶべきことはある。だがリンネにとつてこの模擬戦は、サイタマの強さの秘訣を知る大きなチャンスだ。そのためには勝つしかない。それをサンサーラは負けてもいいと言う。

「リンネが強さにこだわるのは、学校で虐められて養祖父を看取れなかつたからなんだ。そこからは大切なものを守れるようとにかく、誰からも見下されたくないの一点張り。でも一回負けたら、少しほ自分を見直すかもしれないと思つてね」

「……確かに敗北は己を見直すきっかけになる。周りが見えてないヤツにはちようどいい仕置かもな」

人のことを言える身じやないがなど、内心自虐を交えて小さく笑つた。

「両者構えて!」

リングでは、何故か審判に名乗り出たバングが二人に声をかける。促された二人が前に出た。リンネはサイタマを見つめて……睨みつけている。サイタマはサイタマでガニ股・猫背でボヤーッとしている。

「ん? 強さ?」

と、聞き覚えのあるワードに違和感を覚えるジェノス。『リンネ』と『強さ』。どこかで聞いたことのある組み合わせだ。彼の師がリンネに模擬戦を申し出た理由の――

「おい! それは!!」

「リンネが強さを気にする理由だね」

「知つていて言わなかつたのか!?」

一瞬サンサーラに向かつていこうとするジェノスだが、すぐに顔を

背けて頭を搔きむしる。湧き上るのは激しい後悔だ。サンの サーラ
に聞いておけば師の手を煩わせることはなかつたのだから。

「サイタマさんは魔法を体験したがつてたし言つたところで意味ない
よ。それに……」

「それに何だ」

「リンネにはいつまでも逃げてないで、現実を見てもらわないとね」

「始めッ!!」

「始めッ！」

「おっ！」

開始の合図と同時に、リンネがサイタマに向かつて走り出す。ライフはたつたの五、回避は不可、ガードも片腕だけ。彼女が攻めることで、サイタマはガードを強いられる。唯一使える片手を封じられてしまうのだ。捨て身の攻撃もライフが五では不可能。回避からのカウンターもできない。最速で攻め続ける短期決戦が、リンネが勝利に近づく最善の方法なのである。

「ガキなのに動きが早いな。魔法のおかげ？」

試合が始まつたというのに緊張感の欠片もない。構えていた腕もいつの間にか下がつている。リンネには理解できなかつた。これがサイタマのスタイルというのか。意図が見えないが彼女に立ち止まる選択肢はない。

「はあッ！」

「つと

振り抜いた右腕はサイタマの左腕に止められた。リンネの拳圧が二人の周りに小さな風を起こす。彼女も勝負を決めるつもりで打つ

た。並みの相手ならガード越しでもライフを大きく削られる。ところがサイタマは気の抜けた表情を全く変えない。

LIFE 5

ライフにも変動はなかつた。

「はあああッ!!

「おおっ」

次の左腕も受け止められた。今度も一人を中心に強い風が吹き抜ける。これもリンネが打てる全力の一撃だつたのだが、手応えがまるでない。一方でサイタマは、彼女の全力の打ち込みを珍しいものでも見るようにならぬ不思議そうに眺めていた。

「パンチも光つてるし、子供の割に強い。受けたときに変な感じするからこれが魔法なのかな？ 他にもいろいろあるのか？」

「!!」

サイタマは思つたことを口にしているだけなんだろう。だがリンネの本気の打ち込みを片腕で樂々防ぎ、軽口を叩くと嫌味にしか聞こえない。表情に出ずとも、リンネの奥歯が音を立てて軋む。防がれた右腕を素早く引くと、次の攻めの態勢をとつた。

「私は……コケにされるために格闘技をやつてるんじゃない」

放された渾身の突きはまたもガードされる。風がリンネの長い髪を大きく揺らし、サイタマのジャージの襟を揺らした。

「じゃあ何のためにやつてんだ？」

「私に勝つてから聞いてください」

休む間もなく連打を繰り出し、サイタマに攻撃の隙を与えない。その中にも陽動、本撃を交えて搖さぶりをかけていくリンネ。ライフが少ないサイタマは、どんな一撃でも致命傷になり得る。誰であつても、この仕掛けは相当精神にくるはずだつた。

「ちょっとまかして面倒だな」

ところがサイタマは、文句を言いながら眉を八の字にするだけ。低めなテンションとは裏腹に驚異的な反射速度でリンネの連撃を防ぎきつている。ガードした際の鈍い音と衝撃波は、目にも留まらぬ攻防とは不釣り合いな重さだつた。

——これだけ受けているのに全く引かない……こんなの初めてだ。

まるで鋼鉄の壁を殴つてゐるようと思えてくる。パワーヒツターのリンネがスタミナ度外視で打ち込んで、サイタマが顔を歪ませることはない。初めて会つたときと変わらない、気の抜けた感情の見えない顔だ。

「ふわあ～～～～～～」

「この……!!」

リンネの殴打が一気にギアを上げた。

「ああアアア～～～～～あれ？　ちょっと速くなつた？」

が、早くすると相手もそれだけ速くなる。しかもその自覚が当人にない。ガードは残像すら見える速さにもかかわらず、サイタマにとつて大した違はないのだ。

——あの時より強くなつた。なつたはずなのに。

相手はかつてない強敵だとわかつていたし、一筋縄ではいかないと腹も決めていた。

——馬鹿にされて、見下されて、このままじや昔と何も変わらない……あのときと何一つ……

だが何かが根本的に違うのだ。覚悟とか戦術とか、そんなものの話ではない。説明のできない覆しようのない違いが、二人の絶望的な実力差に現れていた。

——だからこのままじや……

——私が弱いのが……いけなかつたんだ——

「ダメなんだ！」

目の覚めるような右ストレートが、サイタマの鳩尾めがけて振り抜

かれた。

「おおつ！」

ズドン！ と今までとは段違いの衝撃音が反響する。攻撃そのものは容易く防いだサイタマも、今日初めて驚嘆の声を上げた。

「強くならなきやダメなんだ!!」

間髪入れず、リンネは左手を握りしめる。そこから普段からは考えられない大振りで、力の限りの左フックを打ち込んだ。

「ほつ」

「うわっ!?」

だがサイタマに届くまえに、ハ工を叩く要領で叩き落とされてしまう。かなり体重を乗せていたところに更に下へ落とされてしまい、上半身が前に出てつんのめりそうになる。

「この！」

身体が投げ出されかけたところに、無理やり右脚を前に踏み出した。崩れた体勢から素早く体勢を正す。常人には到底無理な修正能力は、日々鍛えあげた体幹と生まれ持った身体能力の賜物だ。

「はあアアッ!!」

振り向いたところでの後ろ回し蹴り。つんのめつて間合いが広くなつたところで、距離を詰めず反撃できる技だ。一度背を向け、振り向く勢いのまま蹴り上げようと足を振り上げかける。

「よつ」

それも数十センチ上げたところで、サイタマに押さえつけられてしまつた。いつの間にかリンネのすぐ隣に移動している。一瞬二人の目が合うも、董色の瞳はすぐにサイタマの視界から消えた。

「あのときと同じじゃ！」

「お？」

サイタマの懐から低い姿勢で、リンネは脇をしめて右腕を引く。今二人に間合いはない。文字通りのゼロ距離である。本来ボディーブローは決め手にはなり得ないのだが、ライフが一桁の変則ルールならその限りではない。密着しているとガードができないこの技は、サイタマにとつて致命的な一撃なのだ。

「ダメなんだツ!!

大きく叫んだリンネ。紅く輝くブローはサイタマの腹部へと吸い込まれた。

「ほい」と

ハア……ハア……ハア……

激しい打撃音が耐えながら数秒前から一軒聞こえるのはリンチの喘鳴だけだった。無理な連打を重ね、疲労困ぱいの彼女の視線の先は、震える自身の右腕。防がれるはずのない距離と速さで繰り出されたはずの拳は、サイタマの腹の前で掴まれていた。

[...]

「サンサーラの時もじいさんがどうとか、あいつみたいに強くないとか、また失うとか。話すこと全部マイナス思考じやねーか。上から試合を見てたときから思つてたけど、なんかお前ヤバいぞ。大丈夫か？」

二度の問いかけにもリンネは口を開かない。黙つたまま、掴まれて
いる腕を見つめていた。

「でも何となーくお前が強くなりたい理由もわかつてきた」

「言わないんだつたら俺が言つてやる。お前、好きで格闘技やつてねーだろ？ 強くなるために仕方なくやつてる氣がする。俺の予想が当たつてるなら、お前は——」

「舌を噛みたくなかったら口を閉じてください」

動き出しは一瞬だつた。リンネが掴まれた腕を引くと同時にサイタマから背を向け、前に転がるようにその左腕をしつかり巻き込んだ

のだ。あまりの速さと動きの違いに、サイタマすら声を出す間もなかつた。彼のわずかなライフを確実に削るために温存していた、リンネの最も得意とする技——投げ技だ。

「はあああアアツ!!」

リンネとサイタマの身体が一回転する。豪快な投げは、浮き上がり後者を床に力一杯叩きつけて轟音を轟かす。ドン！ と地に響く音共に

、落とした付近が小さく揺れるほどの衝撃がリンネの腕を伝った。今まで何度も経験してきた、確かな手応えと共に。そして何よりも

「……………」

床に伏す、物言わぬサイタマが全てを語っていた。

「おお!!」

今日初めてのギャラリーの反応は様々だ。サンサーラは歎声をあげ、バングも感心したように笑みを浮かべていた。一方でジエノスは腕を組んで黙つたままだ。だがそんなものはリンネにとつてどうでもよかつた。

「マイナス思考とか、格闘技が好きじゃないとか、仕方なくやつてるとか……だから何なんですか……」

指一つすら動かないサイタマに投げられた言葉はとても静かで、冷たい。だが彼への怒りはリンネの内に微塵もなかつた。そんな感情を抱く必要はないのだ。今の彼女にとつて重要なことは一つしかない。

「絶対にあの日を私は忘れない。あのときから何もかもが変わった」

あるところに心の優しい、どこにでもいる普通の女の子がいた。他の子供達と違うところいえば、彼女にはちょっととした才能があり、富豪の養子であることぐらい。ところがある事件をきっかけに、少女は強さに執着する修羅へ堕ちた。

「誰にも馬鹿にされないほど……見下されないほど強くなれば、弱い私はいなくなる。誰よりも強くなれば、私は前へ駆け出せる。そして今、貴方の強さを手に入れるチャンスを得た……この意味がわかりま

すか？」

刹那、少女の目が大きく見開かれた。

「これでもう何も失わない。大切なものは自分で守ることができる！」

私を馬鹿にしたり見下した奴らだつてぐうの音も出ないし、これらは誰一人そんなことはしなくなる！」

あの日を糧に、好きでもない格闘技に没頭した。強さを求めて苦痛に耐え、限界を超える。少女は立ち上がり続けた。ひたすら前に走つて、遂にここにたどり着いたのだ。

「誰よりも強い私に！ やつとなることができるんだからッ!!」

修羅の行き着く先。そこへリンネは辿り着こうとしている。絶対的な強さを誇る存在へと至ろうとしていたのだ。目指してきた頂きへと、今まさに手を伸ばして――

「あーびっくりした。まさか投げられるとは思わなかつた」

「圧倒的な『強さ』が立ちはだかつた。

「え……？」

「よつこらせ……あーあ。汚れちゃつたじやんか。着替え持つて来てないから吹つ飛ばされないようにガードしてたのに…………」

たつた今床に叩きつけられたはずの男はジャージを払いながら愚痴をこぼす。

「あ！ 僕が落とされたところ凹んでるじゃん！ 今度は俺のせいじゃねーからな。お前らで何とかしろよ」

息も絶え絶えに立ち上がつたということもなく

「それにしてもちよつと遊びすぎたなあ。ジエノス達にみつともないどこ見られたくないし、俺もぼちぼち攻めねーと」

防戦一方の戦況に困ることもなく

ダメージを負つた様子もないサイタマの姿が、全てを物語つてい

た。リンネ渾身の投げ技すら、ジャージを汚した以上の意味はなかつた。彼女が外そうと必死になつたガードも、汚れたくないだけに過ぎなかつたのだ

それだけを何とか絞り出す。頭では理解している。事実はとても単純なことで、決まつたはずの投げ技が全く効かなかつただけだ。誰の目にもわかるはずなのだが、この結果に、彼女の心が追いついていない。

「あ…………の」

そんなもん俺は聞かれても困る
お前の扱いが弱かっただけだわ！」

「ああああああああああアアアアアアアツツツツ!!!」
強くなりたいと願つた少女が耐え切るには現実は非常すぎた。

感情に任せたままにリンネのリンカーコアから大量の魔力が叩き出される。全身に圧倒的な魔力を纏うと、足元には紅い魔方陣が展開される。更に彼女を中心に吹き出す暴風はサイタマのジャージに容赦なくチリをぶつけまくる。

「おお！なんか魔法っぽい！！」
けどジヤージが……」

今までとは違う魔法を見られるワクワク感と替えのないシャーリングが埃っぽくなる憂鬱さの狭間で葛藤しつつも、サイタマはリンネから目を離さない。暴風と魔力に臆することなく彼女の動きを見据えていた。

「あと少し、あと少しであの強さが私のものになるのに…………」

一方のリンネは前に突き出した手に魔力を集めていく。心は荒れ狂つてもやるべきことは身体が覚えているのだ。やがて収束した魔力は巨大な球となり、眩いばかりの紅い魔力光がほとばしった。

目も眩むほどの輝きの直後、最大出力の砲撃魔法がリンネの右手から放たれた。彼女の激情そのものと言える魔力の奔流は床を吹き飛ばしながら突き進み、あらゆるものを見事に吹き飛ばしてしまった。それでも彼女は止まることなく、そのまま突き進んでいった。

迫っていく。

「どことん俺の思つてた魔法と違うよな。今度はビームつて、魔法使いじゃなくて宇宙人じゃねーか」

が、こんなときでもサイタマはマイペースを崩さない。リンネの砲撃を見て少し前に戦った宇宙人の親玉を思い出している始末だ。

「でもまあ結構面白かったし、洗い物が増えただけの価値はあつたかな。後はコイツを大人しくさせたら終わりだ」

“ビーム”を正面にして中指を丸めて、親指で上から押さえつける。小学生がよくやるあの遊びの構えを、戦闘中に大の大人がするのはバカ以外の何者でもない。だがそれをサイタマがするとなると、話は大きく変わつてくる。

「チェックメイト」

無駄にかけられた親指の圧から、中指が解放された瞬間だつた。

「え!? 何!? なんで砲撃が真つ一つになつ——」

第4話 強くなる意味

——ミツドナルダ・とある競技場のトレーニングルーム——

「うつ……」

「あつ、目が覚めた」

意識が戻った途端、聞き馴染みのある声が聞こえた。リンネの知り合い兼ファンの男の子の声だ。彼が揺すっているからか、身体が変に揺れている感覚がある。それになぜかポカポカと暖かい。その気になれば二度寝もできそうだ、ぼんやり思つたりする。

「おーい。聞こえてたら返事してよ」

だが気が付いたことはバレてしまつていて。絶えず揺すつてくるのもさすがに煩わしい。狸寝入りの趣味もないのに、リンネはゆっくり目を開けた。

「へ？」

その視界に見えたものは、ツルリとハゲあがつたらつきよ頭だった。

「やつと起きた。サイタマさん、リンネが起きたよ」

「マジ？ 早くねえか？」

「そこはほら、リンネだし」

「……それでいいのかよ」

サイタマとサンサーラが何か話しているがリンネの頭には入つてこなかつた。謎の揺れ、目の前のハゲた後頭部、心地よい温もり……次第に頭も働き、少しずつ状況を把握していく——

「な、何で!? サイタマさん!」

ようやくサイタマにおんぶされていることに気付いた。

「お前が気絶してたからだよ。気絶してる奴を放つておく訳にはいかないだろ。俺達もここを出なきやいけないし、おぶつていくしかね——じやん」

「そ、そうですけど……もう大丈夫です！自分で歩きますッ！」

意識が戻ったのに、いつまでも背負つてもらう訳にはいかない。それに中等部にもなつておぶられているのは、さすがに恥ずかしい。早くサイタマの背中から降りようと身体をバタつかせた。

「コラ暴れるな。急に動いたら——」

「痛ッ!?」

勢いよく振った右足が鈍く痛んだ。目を向けてみると、右足首に記憶にない包帯が巻かれている。ゆっくり動かしてみると歩けないほどではないにしろ、はつきりとした痛みを覚えた。痛がるリンネを見たサンサーラが、息を吐いて肩を落とす。

「他の打撲とかは治せたんだけど、足首だけは治しきれなかつたんだ。明日には治つてると思うけどね」

「だから今は大人しくしてろ。出入り口までは運んでやるから」

この競技場の選手用出入り口は駐車場と直通している。サンサーラの迎えもそこへ来るのだろう。リンネの迎えも同じ場所の予定だ。無理して歩いて足を悪化させるか、多少の恥ずかしさを我慢するか……

「お願ひします……」

「暴れるほど元気なら大丈夫そうだね。吹き飛ばされたときはどうなるかと思つたよ」

「あ……」

リンネの脳裏に模擬戦の記憶がフラッシュバックのように蘇る。最後にサイタマか独り言を言つて、その後で砲撃が割れたところまでは覚えていた。だが自動車にひかれた様な酷い衝撃を最後に記憶が途絶えている。

「簡単に言うとね？君の砲撃をサイタマさんのデコピンが真つ二つにして、そのまま君も吹き飛ばしたんだ」

「デコピン!? そんな訳——」

「ない、と言いかけて口を噤む。リンネが最後に見た光景はまさにそれだつたからだ。放つた砲撃が、サイタマの直前で真ん中から割れた……信じられないような結末だが、相手が彼となると途端に現実的な

ものに思える。最初は夢かと思ったリンネだが、やはり紛れも無い現実だと実感せざるを得なかつた。

「私は……負けたんですね」

「うん。デコピン一発でライフ全部持つてかれてた。君の完敗だ」「…………」

リンネの持てる力を全部ぶつけても、表情を少し変えるのがやつとだつた。ハンデをもらつた上に手加減までされたのに手も足も出ず、得意の投げ技は全く効かなかつた——彼女は負けたのだ。サイタマに。あの理不尽な強さの前に。

「さつきはすまん。ビームを吹つ飛ばすだけにするつもりだつたんだけど加減ミスつた」

「いえ……競技に怪我はつきものです」

「なんかあのコスプレのおかげで軽い怪我で済んだつてな。名前はなんだつけ？ バリアアポケット？」

「バリアアジャケットだよ」

「それそれ。あれも魔法らしけどかなり丈夫だつたな。いろいろ面白かつた」

面白かつた——それがサイタマの感想だつた。楽しいのならわかる。模擬戦が楽しいという人間はいるだろう。だが彼は面白かつたと言つた。リンネが必死になつて戦つていたというのに、それを面白がつっていたのだ。

「私の実力はその程度だつたということですね。わかつてはいましたが……」

ここまで努力は無駄とは思わない。リンネが絶望するにはサイタマは強すぎた。彼に勝てないからといって、彼女が弱いことにはならない。だが……事実相手にならなかつた。

「面白かつたのはそつちじやなくて別のことだけど？」
「別？」

思わず聞き返したリンネ。まさか模擬戦以外とは考えてもなかつたのだ。

「お前と戦つてたら中学生の頃を思い出したわ。ガキの頃の俺と今の

お前つて似てるところがあるんだよなー」

リンネと自分が似てることを面白がっていたというサイタマ。外見ではあるまい。性格……も多分違うだろう。自分はもつと空気が読めると、リンネは自信を持つて内心頭を振った。

「似てますか？」

「お前ぐらいの年のときは、こんなに弱くて生きていいけるのかとか考へてた。不良にも怪人にも負けてばつかだつたし」

「サイタマさんが……!?」

「ガキの頃だぞ。あのときは社会との相性がよくないとか思つてたけど」

今のサイタマからは想像もできない。まるつきり同じとは言えなが、自分に向けるか外に向けるかの違いだけで似ている気もした。「他にはだな…………どうやつて生きていけばいいのか全然わからないとか」

「——!!」

懐かしいなーと能天気に振り返るサイタマとは裏腹に、リンネの呼吸が詰まる。実際には一瞬だつたのだろう。だが彼女にはそれが何十秒にも感じられた。心の奥底に秘めてきた想いが、こうも容易く引きずり出されるとは考えてよいなかつたのだ。

「お前の事情はわかんねーけど、これだけはなんとなくわかる。『あの日』とやらに何かあつて、お前はどうすりやいいかわからなくなつた。訳わかんねーから、とりあえず強くなろうつて決めたんだろ?」「とりあえずなんて!」

「ならお前は何を目指してんだ? 強さの先に何がある?」

反論に対するサイタマの問いは、くしくも約束した勝者の権利。だが彼はもうほとんど核心に至つていて。リンネにしては今更話したところなのだが約束は約束、口を閉ざしている訳にはいかない。目を閉じて今一度決心を決める。

「どんな悪意も手を出せない誰よりも強い自分。大切な人を誰も悲しませず、過去を振り払つて前に進——」

「なんだそれか。止めた方がいいぞ。強くなつて解決することじやな

い

そしてサイタマは、真っ向からぶつた切つた。

「止めた方が……いい？」

「そうそう。どんなに強くなつたつてバカにする奴はいなくならないからな。それに強くなつたつて誰かを悲しませるときもあるし、守れないこともある」

“あの日”を清算できなかつた彼女は、強くなることで自分を変えようとした。誰よりも強くなれば前へ駆け出せると思つていた。「お前をバカにしてる奴は、お前が弱いからイジメるのか？ 強くなつたぐらいで見る目を変えるのか？ お前の強さが誰かを悲しませることはないのか？」

だが強さの果てに行き着いた男は、悪意も手を出せない強さは幻想だと断じ、リンネの想いを一つ一つ丁寧に潰していく。目指す先人^{サイタマ}の言葉はあまりに重くのしかかつた。

「強さは今と未来は変えられても、過去の上塗りはできないぞ」

「つ…………！」

そうじやない、とは口が裂けても言えまい。相手はリンネが望んでやまない絶対的な強さの持ち主。そして幻が消えて唯一残つた過去と向き合うには、今のリンネは弱いすぎる。立ち向かう術のない彼女は、結局サイタマの背中にしがみつくことしかできなかつた。

「結果は結果だつて割り切れないと。お前ならいけるだろ。さつさと受け入れた方が楽だと思うけど？」

「そんな選択ができるなら苦しむことはなかつた！ 誰もが貴方みたいに強くない！」

気軽に無理難題を口にするサイタマに、リンネが声を荒げる。子供時代が似てると言えど、どう行動し、何が起き、どう捉えたのか。それによつて結果は違つてくる。リンネにサイタマの団太さはなく、サイタマにリンネの優しさはない。二人の結果は必然的に違うものとなつた

「…………面倒な奴だな。それじゃあ今ままやれよ。俺も自分が絶対正しいなんて思つてないし、どつちがいいかなんて誰もわからねー

から

「そんないい加減な……」

「るせー！ 僕だつて二十二歳まで何すりやいいかわかなつかつたんだ。ガキのお前にわかつてたまるか!! 文句しか言わねーなら置いていくからな」

「ああっ！ ゴめんなさい!! 降ろさないで！」

リンネを降ろそうとしたサイタマの背中に、リンネは必死になつてしまつた。好き勝手言つているのはハゲジヤージだとわかつてゐる。だが今のリンネは取り残されたくない一心だつた。唯一の道標はへし折られ、示された道は越えられない程に険しい。そして何もない暗闇の中にいるのは、リンネとサイタマの二人だけだ。

「お願ひだから置いていかないで……」

ここで答えを得なければどうなるか、彼女自身がよくわかつていた。

「えつ……わつ!? 落ち込むなよほら！ いいよわかれば！ わかれば！」

背中に顔を埋められて、サイタマもようやく失態に気付いた。さすがにヒーローが子供を泣かすのはマズイと思つたのだろうか。慌てて震えるリンネを慰めようと優しく揺する。

「こうなりやあれだ。練習も結構やつてるっぽいし、とことんやつた方がいいなお前」

「えつ……？」

その最中、サイタマが諦めたように呟いた。リンネの耳にもはつきりと届く。

「どうしても“あの日”を受け入れられねーんだろ？ だつたらお前がやり切つたつて思えるまで強くなつて、後のこととはそこから考えるしかないじやん」

それはとりあえず今やつてることを続け、“誰よりも強い自分”になつたところで改めて道を探るというものだつた。だが結局は問題の先送りだ。そして何よりも、一度折られた道標を目指せというのは素直に受け入れられるものではない。

「でも……さつきサイタマさんは強くなつても仕方ないって
…………」

「だからそれは俺が思つてるだけだつて。強くなるのはお前じやん」
サイタマの無愛想な声が静かな廊下に反響する。リンネは黙つて
聞いていた。

――人のことだからつて適當なこと言つて…………

散々貶した挙句、最後はそのまま続けると言われて納得など出来る
訳がない。無責任な言い分になど腹立たしくて仕方なかつた。

「途中で何かあるかもしねれない。強くなつたら何かが変わつて、本当に
バカにされなくなるかもしねれないだろ」

――かもしれない……かもしれない!?　だから無責任なん
だ!!　できるかもわからないのに好き勝手言つて。本当に私を想つ
てくれるならこんなこと絶対に言わない!!

サイタマの調子は全く変わらなつた。抑揚のなく言葉を声に出し
ているだけで、そこに責任や想いなどは感じられやしなかつた。彼女の
養父養母、コーチがかけてくれる言葉のような暖かみはあるでな
い。

「前にも誰かに言つたつけ。自分で変われるのが人間の強さだ、つて」
「ツ!!」

それなのに、リンネには全部がひどく優しい響きに聞こえる。強さ
の頂点に立つ男は、いとも簡単に変われると告げた。彼女の心を叩き
のめした“あの日”すら受け止められる可能性を口にした。

――変わるのが強さ…………

格闘技、競技の強さとは違う、自分に向けられる強さ。それさえあ
れば、大きく歪んだリンネも変わることができると言うのだ。底にあ
るのは応援や愛情ではない。サイタマが積み上げてきたものに対する
自信だつた。圧倒的な自信に基づいた言葉は、自信のないリンネに
は憧れるほどに魅力的だつたのだ。

「だけど私は…………」

一方で自分が変わることができる自信は微塵も見つけられない。
道標は見えた。だが至る道が見えないままだつた。どう変わつたら

“あの日”を清算できるのか、ヴィジョンが露ほども想像できやしないのだ。

「どうして私が変わるとと思うんですか？　こんな……こんな私が」
だからこそ、サイタマがリンネの可能性を信じ続ける理由が知りた
かった……彼の言葉で聞きたかった。

「どうなんですか？」

「何言つてんだお前」

「俺を投げ飛ばせるぐらい努力してきた奴が、変わる努力ぐらいでき
ない訳ないだろ」

——ミッドチルダ・とある競技場の選手用出入り口——

「サイタマ先生」

「ん？」

「なぜ先生はリンネ・ベルリネットをあれほど気にかけたのですか？」
先生がリンネ・ベルリネットに勝利して数十分後、俺とバングが通路の安全を確保したところに先生とサンサーラ、そしてリンネが入り口までやってきた。足を負傷したという彼女だが、間髪入れずやつてきた迎えに連れて行かれてしまった。今はサンサーラの迎えを待つて警戒態勢でいるところだ。

「気にかけるつて…………ちょっと話してやつただけだけど…………なんか変？」

「いえ…………先生が長話に付き合うのは珍しいと思つただけです」

「ああ、なるほど」

長い話が死ぬほど嫌いな先生が人生相談にのるとはよほどのことだ。俺の考えが及ばない理由があるに違いない。

「あのリンネって奴、子供の割には強かつたからな。油断してたら投げ飛ばされたし。ちょっと感動した」

「あれには俺も驚きました。見ている感じでもA級ヒーロークラスの実力はありますね。単独でも災害クラス『虎』ぐらいは容易く対処できると思われます」

まさか先生が投げられるとは、天と地がひっくり返つても考えもしなかった。子供にしてあのレベルの戦闘能力は驚異と言うほかない。「だけど口も態度も変だつたしな。見て見ぬ振りして気分が悪くなるより、本人に直させた方が楽だつて思つたつてこと」「なるほど…………自分の戦いだけでなく、他人の戦闘中でも相手の発言や拳動を分析していくんですね！ 心理状態を読んで最善の選択をしていた……さすがです！ 先生！」

「どこをどう聞いたらそうなるの？」

絶対的な力で生まれる余裕を利用した戦略は素晴らしいの一言だ。やはり学ばなくことはまだまだある。

「気分が悪くなつたのは僕だよ。何であなつちやつたのかなホント」

「あれ？ 機嫌悪いのか？」

「先生は気にしないでください。結果が思い通りにならなくて拗ねているだけです」

「ふーん。よくわかんねえ」

「いいよ別に。前向きに考えるから。サイタマさんで無理ならアレしかいないつてことで」

「なんだそりや」

現実に目を向けさせると、いう奴の目論見は成功した。想定外だったのは、先生が思つた以上にリンネを見込んだことだろう。そうでもなければ悩み相談に付き合つたりはしない。

「サイタマさんみたいに強い人がダメ出ししてくれたら、リンネも強くなるのを止めるかなつて思つたのに」

「奴を止めるには他にあり方を示すしかなかつた。力の近い奴や因縁のある相手の方がよかつたな。先生では格が違いすぎて参考にするならない」

「格が違うから諦められることもあると思うよ？」

「どうか。奴も強さを求める者の一人。だから先生に惹かれたのか。何事も苦としない圧倒的な強さは、力を求める俺達にはあまりに眩しい。同じ願望があり、同じ人物を慕う者として意見を交えるのも悪くないかもしねれない。」

「今度話してみるか」

サンサーラに頼めば何とかしてくれるだろう。奴も先生について聞きたいことは山ほどあるに違いない。互いにメリットがある。

「何？ なんか言つた？」

「いえ何も」

私用を先生に伝える必要もない。屋敷に着いたところでサンサー ラを呼び出そう。

“後悔が残つた一日”

今日一日の総括をするなら、きっとこうなるに違いない。夢にまでみた強さを手にするチャンスがあつて、新しい道を示されて、選べなかつた日だ。こんなに濃い一日は“あの日”以降は一度もなかつた。（差し出された手を取れなかつた…………眩しそうに手を伸ばすこともできなかつた）

結局サイタマさんの答えを聞いた後も、私は変自分が変わると思えなかつた。努力で“あの日”を受け入れられるなんて、やつぱり信じられっこない。格闘技しか取り柄のない私にできる努力は一つしかなかつた。

（だけど…………ちょっと嬉しかつた）

手を差し伸べてくれたこと、変われるって言つてくれたこと、何も見えない場所で、私の隣に立つて一緒に道を探してくれたこと…………置き去りにせずおぶつてくれたこと。全部嬉しかつた。今の私を否定した上に優しさの欠片もなくて素っ気なかつた。でもそれも私を気にかけてくれていたから。

「私は彼の期待を裏切つた。だからもう――――」

不安がない訳じやない。意味がないかもしれないという恐怖はある。だけど可能性を見捨てた私に残された選択肢は一つだけだ。見下されない強さ、大切な人を不幸にしない強さを求めて戦うことだけ。この暗闇には二度と誰もやつてこない。だけど覚悟はもう決めている。

「過去を振り切る日まで……私はもう誰にも負けない!! チャンピオンにも私に土をつけたあの子にも!! 絶対に!!」

強く握りしめた両手は冷えきついて、とても冷たかつた。

ウインター カップ開幕のひと月前のことだった。